

## 兩次海外經驗中交錯出漱石觀看東亞的視點與台灣書寫

曾秋桂

淡江大學日文系教授

### 摘要

本論文先回顧漱石從兩次海外經驗中獲得之兩面觀察事情本質的觀點，再以此對照漱石文學中對台灣的書寫而完成。此兩面觀察事情本質的漱石獨自觀點，亦即是同時敘述看似矛盾見解的方式，稱之為反舉證手法，而非單純的二元對立論式闡述的觀點。此進一步深化後，發現是台灣書寫中的「異化」手法來繼承。常被後殖民地理論派拿來當檢視標的之漱石文學，其實有關台灣書寫部分是非常如實反映時代的脈絡。漱石文學中的台灣書寫是由彰顯日本帝國主義時代的近代文明光輝，往外推而至描繪台灣為一個與日本近代社會不同，卻可以讓無法適應近代社會生活的人們的一種避風港的獨特空間。此為遵循時代脈絡下精讀文本的客觀產物，正也是為何後殖民地理論興盛時代中，遵循時代脈絡下精讀文本，仍是必要不或缺的原因。此無非證明擁有兩面觀察事情本質觀點的漱石筆下所創作出的文學，能耐得住各式研究理論的考驗。因為漱石文學當中，確實烙印著時代脈絡的訊息。

關鍵字：漱石文學 2次海外經驗 兩面性 台灣 書寫

**Glance at east Asia of Soseki with twice overseas exposure  
crossing over: Pointing out the ecriture of Taiwan in his works**

Tseng, Chiu-kuei

Professor, Tamkang University, Taiwan

**Abstract**

This presentation has explored the ecriture of Taiwan on the assumption that is the viewpoint of the ambivalence which Soseki (1867-1916) acquired through twice overseas exposure. This viewpoint of ambivalence is the method of an anti-supposition by expressing contradictory views simultaneously. Soseki was unrelated from the way of thinking by a simple binomial confrontation. This anti-supposition is inherited on the ecriture of Taiwan by the technique of dissimilation. The ecriture of Taiwan which has drawn in the Soseki literature according to the context of that age is replaced by the phase of the heterogeneous sanctuary from the phase which reveals the glory of the modern civilization at that imperialism age. This is a result of the perusal which appears from the context of a text, and Soseki has engraved the clear message into the work in the form which responds to such a research attitude and a method.

Keywords: the Soseki literature, twice overseas exposure,  
anti-supposition, Taiwan, ecriture

## 2回の海外体験が交錯する漱石の東アジアへの視線 —台湾のエクリチュールに触れつつ—

曾秋桂

淡江大学日本語学科教授

### 要旨

本論文は、漱石（1867-1916）が2回の海外体験で獲得した両面性の視点を前提に、台湾のエクリチュールを探った。両面性の視点とは、矛盾する見解を同時に述べる反措定の方法である。漱石は単純な二項対立的思考からは無縁であった。台湾のエクリチュールにも、反措定は「異化」の手法で継承されている。漱石文学の中で、時代の文脈に従って描かれた台湾のエクリチュールは、帝国主義時代の近代文明の栄光を顕示する位相から、近代社会とは異質なサンクチュアリの位相に置換されている。これは、テキストの文脈から浮かぶ精読の結果であり、漱石はそうした研究態度と方法に応える形で、確かなメッセージを作品の中に刻みつけている。

キーワード：漱石文学 2回の海外体験 両面性 台湾  
エクリチュール

## 2回の海外体験が交錯する漱石の東アジアへの視線

—台湾のエクリチュールに触れつつ—

曾秋桂

淡江大学日本語学科教授

### 1. はじめに

明治に改元した前年に生まれ、大正5年に逝去した日本近代文豪の漱石(1867-1916)の一生は明治維新とその後の日本の近代化の歴史と重ねて見る事が可能である。漱石が新しい時代の幕開けと言える明治期にあたって、大きな課題の一つとして、東洋と西洋との差異をどのように見ていたかは、興味深い。それを究める場合、まず、漱石が日本を離れた2回の海外体験に注目しなければならない。第1回は、明治33年(1900)に日本を出て、約2年間のイギリス滞在を経て、明治35年(1902)に帰国したイギリス留学の旅である。第2回は、明治42年(1909)日露戦争後に設立された南満州鉄道株式会社(満鉄と略称する)の総裁を勤めている旧友中村是公に誘われて行った満州、朝鮮への「四十六日間の満韓旅行」<sup>1</sup>である。中村是公が漱石を招聘した意図については、青柳達雄が「適当な人物に実地見聞記を書いてもらい、内地にPRする必要があると考えたにちがいない」<sup>2</sup>と分析している。前者は、近代化を目指す発展途上国の青年として、留学先の、当時隆盛を極めた先進国イギリスで味わった異文化体験である。一方、後者は日露戦争の勝利によって獲得した満州、朝鮮の植民地や租借地を、勝利者の一員として<sup>3</sup>旅行した見聞<sup>4</sup>である。

<sup>1</sup> 青柳達雄(1996)『満鉄総裁中村是公と漱石』勉誠社 P123

<sup>2</sup> 前掲青柳達雄書 P137

<sup>3</sup> 明治42月11月28日付寺田寅彦宛の書簡(1976)『漱石全集』第14巻 P787では、「至る所に知人があつたので道中は甚だ好都合にアリストクラチックに威張って通って来た」とある。

<sup>4</sup> (1976・初1966)『漱石全集』第16巻 P916に収録された漱石の自筆原稿「満韓視察談」では、「此度旅行して感心したのは日本人は進取の氣象に富んでて貧

この2回の海外体験で得た西洋に対する印象や感想は、イギリス留学に上った途上を含め、イギリス滞在中に記した日記、また発表した『倫敦消息』、『自転車日記』を中心に見ることが出来る。留学での心情は、日本帰国後記した「断片」、随筆、雑文にも散見される。一方、後者については、満州、朝鮮の旅行後、朝日新聞社に発表した『滿韓ところどころ』を主に、またそれを旅行中記した日記、書簡と照らし合わせながら、満州、朝鮮への印象や感想を見ることが出来る。このように、2回の海外体験によって得た西洋と東洋との葛藤をめぐる思考によって漱石の東アジアへの視線が照らし出されるに違いない。

一方、海外体験ではないが、作品中にしばしば登場する日本の植民地になった台湾に対するエクリチュールも台湾出身の論者の関心を特に引く所である。そこで、漱石文学の中で、2回の海外体験と日本の植民地になった台湾がどのように表象されているか、その表象が当時の時代文脈の中において、どのように形成されたかを明確にすることを本論文の目的としたい。

## 2. 漱石の2回の海外体験が交錯する視点

漱石の2回の海外体験が交錯する視点については、詳しくは拙稿「漱石の東洋と西洋への眼差し」<sup>5</sup>を参照されたい。簡単にそれをまとめると、この2回の海外体験を経て、「雑踏さや不潔なものへの生理的な嫌悪感」、「金銭に潔癖な傾向」、「日本を視点にしたイギリスへの批判」、「西洋(留学先イギリス)への両義的視線」、「日本人

---

乏世帯ながら分相應に何處迄も發展して行くと云ふ事實と之に伴ふ經營者の氣概であります。滿韓を遊歴して見ると成程日本人は頼母しい國民だと云ふ氣が起(原文のママ)」と感想が漏らされている。公開された『滿韓ところどころ』に関連のあるものとされている。

<sup>5</sup> 初出は、(2001.08)「夏目漱石のアジアと日本への眼差し—二回の海外体験から—」『亞洲中的日本・日本中的亞洲國際兩義的に會議論文集』P193-212(淡江大学日本語学系・日本研究所発行)で、『夏目漱石試論—漢詩的東洋と小説的西洋の相克』(2002 致良出版社)に原稿を改めて再収録した第一章「漱石の東洋と西洋への眼差し」P29-62を参照されたい。

# airiti

としてのアイデンティティ」、「支那あるいは支那人に寄せる同情」の視点を獲得したと言えよう。例えば、中国人の行動や生活環境に対して生理的な嫌悪感を抱く一方、中国の古典文化をその風土の中に偲ぼうとしている。今までのポストコロニアリズム的解釈では、こうした嫌悪感の表明だけを切り取って取り上げ、漱石が差別意識を抱いている、あるいは、植民地の現実に無知であると批判する論調が一般的であったが、「風流」という純粋に文化的な尺度においては、中国人や中国文明を非常に高く評価している一面も明確に示されているのである。また、イギリス留学中は、「日本人ヲ觀テ支那人ト云ハレルト厭ガルハ如何、支那人ハ日本人ヨリモ遙カニ名譽アル國民ナリ」（明治34年3月15日日記）と思った漱石は満州に来て、「汚ならしい」（『滿韓ところどころ』四）クーリーから受けた生理的な嫌悪感が消えないまま、その翌日に支那人に勘違いされては堪らないという気持ちを、「心細い」と表現している。とは言え、漱石は決して中国の文化を全面的に否定したわけではない。基本的に言えば、『現代日本の開化』<sup>9</sup>でも触れているように、漱石はイギリス留学時代から中国を文化の大国だと見ており、『滿韓ところどころ』までも一貫している。漱石の持つ両面性の眼差しは、基本的に変わっていない。漱石は、ある対象について白か黒かのようなただ一面しか持っていないという極端な見方を示していない。また、絶対的にどちらかでなくてはならないというような二者択一的な見方をするのでもなく、「白」が「白」として見えるためにはそれと対照的な「黒」も同時に見えているという構造的な見方を、漱石は持っていると言えよう。一見すると全く矛盾することを同時

---

<sup>9</sup> (1975・初1966)『漱石全集』第11巻P334に明治44年8月に行った漱石の講演「現代日本の開化」が収録され、そこで漱石が「勿論何處の國だつて隣づき合がある以上は其影響を受けるのが勿論の事だから、吾日本と雖も昔からさう超然として只自分丈の活力で發展した譯ではない。ある時は三韓又或時は支那といふ風に大分外國の文化にかぶれた時代もあるでせうが、長い月日を前後ぶつ通しに計算して大體の上から一瞥して見るとまあ比較的內發的の開化で進んで來たと云へませう」と中国の文化に触れている。

に述べているように見える見解を反措定の方法と呼ばば、これが実は単純な二項対立的思考からは無縁だった漱石の持つ独自の視点だと言えよう。

### 3. 漱石文学における台湾のエクリチュール

漱石が触れた台湾を『漱石全集』(1975 全 17 巻)に当たって調べ、表(一)に整理した。なお、時代背景の説明なども最後の欄に付け加えた。表(一)を見ると、満韓旅行を分岐点に、漱石の台湾を見る目が変わったと見られる。

表(一) 漱石文学における台湾のエクリチュール一覧

作品名 (発表時間)	記述	時代背景
	イギリス留学中 (1900.9.8-1902.12.5)	明治33年(1900)パリ「万国博覧会」では、台湾特産物樟脳の出品 <sup>7</sup> 。
		明治36年(1903)第五回内国勸業博覧会 (3.1-7.31 大阪天王寺153日間)に植民地台湾のパビリオンが初めて出展された。
『吾輩は猫である』 (明治1905.1.1-1906.8.1)	此硝子窓の中にうちやうちやがあがあ騒いで居る人間は悉く裸體である。 <u>臺灣の生蕃</u> である。二十世紀のアダムである。(七、P269)	

<sup>7</sup> 松田京子(2007・初2003)『帝国の視線』吉川弘文館 P57

		明治 40 年 (1907) 東京勸業博覧会開催
『虞美人草』 (1907. 6. 27- 10. 29)	<p>① 「いつ」と糸子は縫ふ手を已めて、針を頭へ刺す。「でなければ、博覧會へ行って臺灣館で御茶を飲んで、イルミネーションを見て電車で歸る。——どつちが好い」「わたし、博覧會が見たいわ。是を縫つて仕舞つたら行きませう。ね」(十 P177)</p> <p>② 「あれが臺灣館なの」と何氣なき糸子は水を横切つて指を點す。「あの一番右の前へ出てゐるのが左様だ。あれが一番善く出来てゐる。ねえ甲野さん」(十一 P187)</p> <p>③ 「糸公…」と云ひ掛けた時紅茶と西洋菓子来る。(十一 P198)</p>	
『坑夫』 (1908. 1-4)	「御前さん、まだ眼が覺めないかね。こ此處から降りるんだよ」と注意して呉れた。それで漸く成程と氣が附いて立ち上つた。魂が地の底へ抜け出して行く途中でも、手足に血が通つてゐる	



	<p>うちは、呼ぶと返つ来るから可笑しなものだ。然し是れがもう少し烈しくなると、中々思ふ様に魂が身體に寄りついて呉れない。其の後<u>臺灣</u>沖で難船した時杯は、殆ど魂に愛想を盡かされて、非常な難義をした事がある。(P482-483)</p>	
<p>『永日小品』 (1909.1.1.-3.12)</p>	<p>學校を出ると中村はすぐ<u>臺灣</u>に行った。それぎり丸で逢はなかつたのが、偶然倫敦の真中で又びたりと出喰はした。丁度七年程前である。(中略)昔の中村は満鐵の總裁になつた。 (P135-136)</p>	
	<p>満州、朝鮮への旅 (1909.9.2-1909.10.17)</p>	
<p>『満韓ところどころ』 (1907.10.21-12.30)</p>	<p>橋本を振り返ると、相變ら鼻の先を反らして、<u>臺灣</u> <u>パナマ</u>だか何だかペコペコになつた帽子を被つた。(二十二 P201)</p>	
		<p>「日英博覽會の美術品」 (42.12.16『東京朝日新聞』)</p>
		<p>明治43年(1910)日英博覽會(5.14-10.31 ロンド)</p>

		ンの西郊、シェファーズ・ブッシュ) 植民地台湾パビリオン (パイワン族の住居と住民の展示)
『門』 (1910. 3. 1－ 6. 12)	宗助は腹の中で、病氣はもう癒つたのだらうかと思つた。又は満洲行の方が墟ではなからうかと考へた。安井は身體から云つても、性質から云つても、満洲や臺灣に向く男ではなかつたからであつた。(十七 P812)	
『道草』 (1915. 6. 3－ 9. 14)	①二、三日経つてから細君は始めて其の日外出した折の事を食事の時話題に上せた。「此間宅へ行つたら、門司の叔父に會ひましてね。随分驚ろいちまいました。まだ臺灣にあるのかと思つたら、何時の間にか歸つて來てゐるんですもの」(十八 P339)  ②細君の父は事務家であつた。動ともすると仕事本位の立場からばかり人を評價したがつた。乃木將軍が一時臺灣總督になつて間もな	作品時間をイギリス帰国後の、駒込 (1903. 3-1906. 12) <sup>8</sup> に世帯を設けた前後の時と察せられる。

<sup>8</sup> 古川久編 (1975・初 1966) 「注解」『漱石全集』第 6 卷岩波書店 P627

	<p>くそれを已めた時、彼は健三に向つて斯んな事を云つた。(七十七 P511)</p>	
<p>『明暗』 (1916. 5. 26— 12. 14)</p>	<p>①此時津田の胸を掠めて、自分の従妹に當る叔母の娘の影が突然通り過ぎた。其娘は二人とも既婚の人であつた。四年前に片付いた長女は、其後夫に従つて臺灣に渡つたぎり、今でも其所に暮してゐた。彼の結婚と前後して、つい此間嫁に行つた次女は、式が済むとすぐ連れられて福岡へ立つてしまつた。其福岡は長男の眞弓が今年から籍を置いた大學の所在地でもあつた。(二十七 P83)</p> <p>②「ぢや行くさ」「うん、行くとも。斯んな所にゐて、みんなに馬鹿にされるより、朝鮮か臺灣に行つた方がよつぽど増しだ」彼の語氣は癩走つてゐた。津田は急に穏やかな調子を使ふ必要を感じた。(三十七 P116)</p> <p>③間もなく三人は離れ離れになつた。「ぢや失敬、僕は停車場へ送つて行かないよ」「さうか、來たつてよさ</p>	

	<p>さうなものだがね。君の舊友が朝鮮へ行くんだぜ」「朝鮮でも臺灣でも御免だ」「情合のない事夥だしいものだ。そんなら立つ前にもう一遍此方から暇乞に行くよ、可いかい」(百六十七 P576)</p>	
--	---	--

満韓旅行までの『我輩は猫である』、『虞美人草』では、その観点は日本で開催された博覧会の趣旨と一致して台湾を見ているのに対し、満韓旅行をした後の作品では、日本国内で居られない人が求める新天地として植民地台湾が位置づけられている。もっとも『坑夫』の作品自体は満韓旅行をする前の作品であったが、「其の後臺灣沖で難船した時杯は、殆ど魂に愛想を盡かされて、非常な難義をした事がある」と語り手が自己経験を語ったことから見ると、『坑夫』は過ぎ去ったことを現時点で語るという手法を取り語った作品であると同時に、坑夫になった後、『坑夫』の主人公が台湾に渡ったことがあるという意味になろう。従って、『坑夫』に触れられた台湾は、満韓旅行をした後の作品の範疇に入れた方が適切である。そして『永日小品』では、旧友中村是公が大学卒業後すぐ台湾に赴任した後、満鉄の総裁の座についたと、触れている。満鉄の総裁として漱石を満韓旅行を招待したため、当然中村是公が満鉄の総裁の座についたのは、漱石が満韓旅行をする前のことになる。一方、『道草』は満韓旅行をした後に公開した作品であるが、作品時間は満韓旅行をする前の時間、すなわち駒込に世帯を設けた時期とされた。とはいえ、台湾のエクリチュールの性質は満韓旅行をした後の作品と類似している。

#### 4. 満韓旅行をする前

##### 4.1 博覧会の視線が注がれた植民地台湾

諧謔的に語られた『我輩は猫である』であっても、銭湯のひと齧として、「臺灣の生蕃」が触れられた。また、『虞美人草』では、宗近が妹の糸子に「博覧會へ行つて臺灣館で御茶を飲んで、イルミネーションを見て電車で歸る」と提案した。作品には突然、台湾が出てくるが、当時の状況から見ると唐突とは言えない。その理由は、大阪で行われた「第五回内国勸業博覧会」に求められる。明治政府は西洋の先進文明大国の列に入るために博覧会を積極的に開催した。20世紀初等の帝国主義全盛時代には、社会進化論的に人種を高等から劣等へとランク付けし、それぞれの人間社会を文明から野蛮へと差別化する思考が当時の科学的先進的思考であった<sup>9</sup>。博覧会はランキングの頂点に位置する「文明」を誇示する行事として欧米で盛んに開催され、「人類学的展示」として実施されている<sup>10</sup>。明治期の日本でもイギリスから始まった社会進化論の影響が次第に広がり、明治36年（1903）に大阪で開催された「第五回内国勸業博覧会」は、「万国博覧会に匹敵するほどの盛大な催し」<sup>11</sup>で、『大阪毎日新聞』（1903.3.7）に載せた「今回の博覧会に台湾館を有する事は慥に一大特色に候」<sup>12</sup>の記事の如く、日本国内では注目すべき大きなイベントの一つとなった。このとき、明治28年（1895）の日清戦争後の講和条約により日本の植民地として編入された台湾館が初めて設置された<sup>13</sup>ことは、当時の日本帝国にとって極めて大きな意味があっ

<sup>9</sup> スティーヴン・J. グールド著鈴木善次・森脇靖子訳（2008）『人間の測りまちがい—差別の科学史』河出書房新社

<sup>10</sup> 日本で「人間動物園」という呼称を導入したのは吉見俊哉（1992）『博覧会の政治学：まなざしの近代』中央公論社以来のポストコロニアリズムの論調である。

<sup>11</sup> 山路勝彦（2009）「日英博覧会と「人間動物園」」『関西学院大学社会学部紀要』108号P4

<sup>12</sup> 『大阪毎日新聞』1903.3.7記事

<sup>13</sup> 松下廸生（2008）「近代日本の博覧会における台湾館の建築造形について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』P269では、今回を皮切りに昭和15年（1940）

た。明治天皇が計7回博覧会場を見学したという<sup>14</sup>ほど重視されている。その大きな意味とは、まさに松田京子が「第五回を名実ともに「帝国」の博覧会たらしめていた」<sup>15</sup>と言ったものであり、つきつめて言えば、現状では「遅れている」が、日本「帝国」の指導によって、「文明」の地としての日本「内地」に近づく可能性を持った「帝国の宝庫」台湾という形で台湾認識が形成された<sup>16</sup>のである。

その「第五回内国勸業博覧会」にも「生身の展示」をした学術人類館が開館された<sup>17</sup>。社会ダーウィニズムの論理から被植民地者を階層化させ、博覧会で見世物とした展示を吉見俊哉は「人間動物園」<sup>18</sup>と名づけ、厳しく批判している。「第五回内国勸業博覧会」に設けた学術人類館に展示された26名の種族には、「台湾生蕃」(1名)、「台湾熟蕃」(2名)、「台湾土人」(2名)が入っている。とりわけ、「台湾生蕃」の日常生活を観察した新聞記者により「梟猛の様を思はれる」<sup>19</sup>と言われた「台湾生蕃」への認識が広まっていった。

「第五回内国勸業博覧会」の開催時、漱石は既に日本に帰国した。漱石が実際に「第五回内国勸業博覧会」を見たかどうかは、記録に残っていないが、少なくとも「第五回内国勸業博覧会」に設けた学術人類館を観察した新聞記者が記した「人類館瞥見」等によって、「台湾の生蕃」のイメージが伝わるようになったのではないか。2年後に書いた『我輩は猫である』では、語り手の誇張を差し引いても、文明の対極に位置する未開の「臺灣の生蕃」への認識が日本社会でステレオタイプ化されていたと窺われよう。漱石は「臺灣の生蕃」を共時的に存在する社会的認識の枠の中で、エクリチュールし

---

の紀元二千六百都市・市制三十周年記念朝鮮大博覧会までの総計49の博覧会・共進会で、台湾館が設置されたという。

<sup>14</sup> 農商務省編(1904)『第五回内国勸業博覧会事務報告』下巻 P60-67

<sup>15</sup> 前掲松田京子書 P53

<sup>16</sup> 前掲松田京子書 P81

<sup>17</sup> 前掲松田京子書 P121

<sup>18</sup> 吉見俊哉(1992)『博覧会の政治学：まなざしの近代』中央公論 P185

<sup>19</sup> 「人類館瞥見」『大阪毎日新聞』(1903年3月9日)

たものだと察せられよう。

松田京子の指摘では、「パリ万国博覧会」では、開催国フランスをはじめとする帝国主義諸国が、それぞれの植民地パビリオンを競って展示させたことを見習って、日本は「第五回内国勸業博覧会」で植民地パビリオン台湾館の設置を実行した<sup>20</sup>という。だが、開催国フランスをはじめとする帝国主義諸国がそれぞれの植民地パビリオンを競って展示した「パリ万国博覧会」を実は漱石はイギリス留学中、イギリス到着前に、見学した。だが、見学後の漱石の資料には、生身の展示に対する感想はなさそうである。また、『我輩は猫である』の刊行4年後、明治43年（1910）に行われた「日英博覧会」では、植民地パビリオン台湾館が設置され、生蕃パイワン族の生身の展示<sup>21</sup>が行なわれていた。漱石の友人で、日英博覧会報道のために派遣された大阪朝日新聞記者長谷川如是閑は、「憐れとも、何とも申す様なく、之を多くの西洋人が動物園か何かに行ったやうに小屋を覗いて居る所は些か人道問題にして、（後略）」<sup>22</sup>と、生蕃パイワン族に対して大いに同情する念を表わした。また台湾日日新報記者田原生も「生蕃館もアイヌ館も同様、一つの見せ物に過ぎない」<sup>23</sup>と憤慨している。しかし、漱石の反応はあまり見られない。ただし、「日英博覧会」に出品する前に上野で展示した美術品を見た後の漱石は、ただ「其点数の少ない事は驚く程であつた」<sup>24</sup>と述べただけであった。漱石が使った「臺灣の生蕃」は、「第五回内国勸業博覧会」から始まったようであるが、その後の言及は一切なく、軽蔑や同情も示されていないため、それは共時的に存在する認識の枠に規定されたエクリチュールと見てもよからう。

---

<sup>20</sup> 前掲松田京子書 P57

<sup>21</sup> 台湾の『台湾日日新報』（明治43年9月29日）に掲載された「日英博生蕃館（上）」のような記事を見ると、台湾でもパイワン族一行の動向が注目を集めていると言えよう。

<sup>22</sup> 長谷川如是閑「日英博たより（三）」『東京日日新聞』（明治43年7月6日）

<sup>23</sup> 田原生「日英博生蕃館（下）」『台湾日日新報』（明治43年9月30日）

<sup>24</sup> （1975・初1966）『漱石全集』第11巻岩波書店 P223

しかし、注目すべきことは、『我輩は猫である』に登場した「臺灣の生蕃」は、本文での位置によって、元の記号的意味を置換されている点である。つまり、猫である吾輩から、「臺灣の生蕃」は「此硝子窓の中にうちやうちやがあがあ騒いで居る人間は悉く裸體である。臺灣の生蕃である。二十世紀のアダムである」と語られているのである。当時のエクリチュールで「臺灣の生蕃」は日本帝国の勝利を意味する植民地台湾の野蛮な住民という帝国主義的視線を受けていたが、漱石は同じ表現を猫による人間の批評として語らせ、日本帝国の日本人を「臺灣の生蕃」と同一視し、明治社会における元の意味を喪失させている。日常的で疑い得ない記号を反転させてしまうこうした手法は、「異化」<sup>25</sup>と呼ぶことが出来よう。作品中での台湾はこうした異化の手法で登場してくる、反転される記号である。

#### 4.2 植民地台湾の特産物「ウーロン茶」

明治40年(1907)東京勸業博覧会を背景に描いた『虞美人草』では、宗近が妹糸子を「博覧會へ行つて臺灣館で御茶を飲んで、イルミネーションを見て電車で歸る」と誘ったところ、結局甲野、藤尾、宗近、糸子の4人で行くことになった。第二会場に配置された「臺灣館」は、「階上に喫茶店を設けて例の烏龍茶を飲ませてお茶の給仕人は臺灣の美人にて」<sup>26</sup>と紹介されている。日本統治期初期においては、台湾烏龍茶は外貨を獲得できる商品のため、台湾総督府は非常に重要視していた<sup>27</sup>。同時に、豪華な「臺灣館」パビリオンが建設でき、特産物が輸出できるようになったことは日本帝国の植民地

<sup>25</sup> 石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織(1991)『読むための理論文学思想批評』世織書房 P164 では、「日用・実用の言葉から、文学表現の言葉への転換の仕組みを「異化」という言葉で定義したのは、ロシア・フォルマリストの代表的理論家、ヴィクトル・シクロフスキーである。(中略)詩人や小説家は、自分の言葉によって、読み手に対照を「明視」させる。そのための様々な言葉の技法が「異化」の手法に他ならない」とある。本論文は同じ意味で「異化」を使っている。

<sup>26</sup> (1907.6)『東京勸業博覧会案内』精行社出版部 P50

<sup>27</sup> 陳慈玉著星野多佳子・藤井敦子訳(2012)「日本統治期における台湾輸出産業発展と変遷(上)」『立命館経済学』P665



支配成功の象徴でもあった<sup>28</sup>。植民地化された台湾の統治成功に烏龍茶が結びつくというイメージは、実は「第五回内国勸業博覧会」<sup>29</sup>にも、「日英博覧会」にも<sup>30</sup>頻出した。その後、台湾では当局の政策により、緑茶と競合しない茶として生産を始めた紅茶の質が改良され、1934年には烏龍茶と並ぶこととなった<sup>31</sup>。しかし、台湾統治がやっと軌道に乗り始めたばかりの東京勸業博覧会の明治40年

(1907)時点では、「臺灣館で御茶を飲んで」と言った「御茶」は、当時の事実としては烏龍茶のはずである。しかし、後に続く『虞美人草』の描写では、四人で「糸公…」と云ひ掛けた時紅茶と西洋菓子<sup>31</sup>が来る」(十一 P198)とされている。結局、作品では四人が注文したのは、烏龍茶ではなく、紅茶である。それは、「臺灣館で御茶」が烏龍茶であった歴史的事実とは明らかに齟齬しているが、藤尾が代表する「ハイカラ」など近代化と西洋文明批判に重点を置いた作品の意図からは、博覧会という西洋文明の象徴的行事の中で、西洋文明を象徴すると見られる紅茶と西洋菓子を登場させたのは無理もないことであろう。「臺灣館で御茶を飲んで」という表現は、台湾の特産品烏龍茶の宣伝となったには相違ない。また、博覧会に着いた夜の時、「あれが臺灣館なの」と何気なき糸子は水を横切つて指を点す。「あの一番右の前へ出てゐるのが左様だ。あれが一番善く出来てゐる。ねえ甲野さん」(十一 P187)と、「臺灣館で御茶を飲んで」という目的に違わずに、博覧会見学にやってきた四人の会話では、宗近が「あれが一番善く出来てゐる」と褒めている。当時の「東京勸業博覧會報告書第二回」には「夜間の點燈裝飾は博覧會場を通じ

<sup>28</sup> 日本帝国による台湾統治は当初、失敗の連続で軌道に乗り始めたのは、1898年から総督となった児玉源太郎が抜擢した民政局長後藤新平により、徹底した調査事業遂行による現地状況の把握と、実態に合わせた経済改革とインフラ建設によるとされている。後藤新平の台湾経営については野村明宏(1999)「植民地における近代的統治に関する社会学：後藤新平の台湾統治をめぐって」『京都社会学年報』7 京都大学 P1-24 参照。

<sup>29</sup> 前掲松田京子書 P60

<sup>30</sup> 前掲山路勝彦論文 P8

<sup>31</sup> 前掲陳慈玉著星野多佳子・藤井敦子訳論文 P665

て此の館が最も成効して居る」<sup>32</sup>と建築の専門家からも賞讃されており、『虞美人草』のこの記述は、当時の事実を忠実に再現している描写である。その中で「紅茶と西洋菓子が来る」という点だけを書き換えた漱石の意図は、考慮すべきである。華やかな「文明」を誇る博覧会の描写の中で、植民地化された東洋の象徴として、近代文明の勝利と支配を意味する台湾の特産品烏龍茶を、近代文明の頂点に位置するイギリスを代表する紅茶に置き換えたことには、逆に近代の帝国主義的文明に距離を置く批判的眼差しを読み取ることができよう。以上からは漱石が社会進化論的思考から無縁であったことが窺えよう。

## 5. 満韓旅行をした後

### 5.1 新天地が求められた植民地台湾

満韓旅行した後、漱石が作品に触れた台湾の関係者は3種類に分けることができる。1つ目は、現地の最高権力者になるグループで、中村是公と乃木希典がその代表である。2つ目は、家族連れで台湾を新天地として求めるグループである。もう1つは、日本国内では定職が見つからず、仕方なく台湾に流れ込むことを考えるグループで、『明暗』の無頼漢・小林が代表している。

#### 5.1.1 立身出世コースの一時的腰掛けとしての植民地台湾

『永日小品』で触れられた中村是公は、既に満鉄の最高権力者総裁の座に就いている。「学校を出ると中村はすぐ臺灣に行った」と言及した箇所から、台湾での経歴が次の満鉄総裁に繋がり、立身出世コースに乗っていることが窺える<sup>33</sup>。満鉄は、「南満州から関東州に至る鉄道を経営するために、政府が半額出資する「南満州鉄道株式

<sup>32</sup> 清水釘吉・伊東忠太・古宇田實・大熊喜邦・岡田信一（1907.8）「東京勸業博覧會報告書第二回」『建築雑誌』第248号建築学会P17

<sup>33</sup> 中村是公は後藤新平の部下として台湾統治で実績をあげ、それが評価されて1906年、後藤新平が満鉄総裁になると共に満州経営に従事した。青柳達雄（1996）『満鉄総裁中村是公と漱石』勉誠社参照。

会社」(略称・満鉄)が、勅令によって明治三十九年末に設立された。満鉄は明治四〇年四月、本社を東京から大連に移し、(中略)従業員が三〇万人以上、関連会社も五〇社を擁する半官半民の巨大な国策会社である」<sup>34</sup>と春田哲吉が述べたような巨大組織である。漱石自身が『満韓ところどころ』で「斯うみんなが總裁々と云ふと是公と呼ぶのが急に恐ろしくなる」(二 P156) と記したように、満鉄總裁の権威が半植民地状態の満州で幅を利かせることを漱石自身は実際に見ていた。また、『道草』では、主人公の健三の妻の父をして、一時、植民地台湾で最高権力者の総督になって間もなくその座から降りた乃木大将の仕事について、「個人の徳は自分に親しく接觸する左右のものに能く及ぶかも知れませんが、遠く離れた被治者に利益を與へやうとするには不充分です。其所へ行くと矢つ張手腕ですね」(七十七 P511) と鋭く指摘している。なお、乃木希典は3代目の台湾総督(1896-1898)で、1年4ヶ月の任期を終えて台湾を離れて行った。その後、赴任したのが児玉源太郎で、抜擢された後藤新平の台湾経営は乃木希典の統治失敗を回復させる意味を持っており、中村是公は後藤新平の部下として台湾経営で手腕を発揮したのである。漱石作品に出たこの2人は、台湾統治と深く関わり、台湾統治と日本帝国の関係を象徴する人物であったとも言える。

### 5.1.2 家族連れの新天地としての植民地台湾

また、1916年の『明暗』では、主人公津田の叔母の「四年前に片付いた長女は、其後夫に従つて臺灣に渡つたぎり、今でも其所に暮してゐた」とあり、植民地台湾は、新しく築いた家庭の生活基盤として選びえる選択肢になっている。

### 5.1.3 逃げ場所としての植民地台湾

一方、1910年の『門』では、「大風は突然不用意の二人を吹き倒した」(十四 P794) と、主人公宗助が友人安井の内縁妻御米と一緒に安井を裏切ったことを喩えている。その後、「不徳義な男女」(十

---

<sup>34</sup> 春田哲吉(1999)『日本の海外植民地統治の終焉』原書房 P66

四 P794) の宗助夫婦は、「途中で學校を退いた」(十七 P812) 安井の未来を案じたが、「奉天にゐる事を確め得」(十七 P812) るまで、安井の辿り着くべき所として、宗助が「安井は身體から云つても、性質から云つても、満洲や臺灣に向く男ではなかつたからである」(十七、P812) と出ている。無頼漢の小林は、友人津田に「斯んな所にゐて、みんなに馬鹿にされるより、朝鮮か臺灣に行つた方がよつぽど増しだ」と言い、「東京に居たゝまれなくなつた結果、朝鮮へ渡つ」(三十七 P113) ることにした。また、津田の妻お延に「僕は世の中から無籍もの扱ひにされてゐる人間です」(八十六 P281) と言い張つた小林が日本国内から飛び出して、選ぶ場所として「台湾」を挙げている。彼が挙げた逃げ場所「朝鮮か臺灣」は、利己主義者の津田は、「朝鮮でも臺灣でも御免だ」と見ていた。

## 5.2 満州渡航を対照的に見て

台湾以外、漱石の作品には満州への渡航者もよく描かれている。蘭信三は満州渡航の動機により「喰いっぱぐれタイプ」、「社会的不適応タイプ」、「満州憧憬タイプ」、「国策共鳴タイプ」、「勧誘タイプ」、「開拓花嫁タイプ」、「家族随伴タイプ」<sup>35</sup>の7つのタイプに分類した。この分類は台湾や朝鮮への渡航者にも敷衍して解釈できよう。宗助と御米の裏切りにより學校を退いた安井の満州への渡航は、「社会的不適応タイプ」に属しているのに対して、東京で居場所がなくなつた小林の朝鮮への渡航は、「喰いっぱぐれタイプ」に入っている。小説の場合は、日本帝国内での生活様式から外れた庶民の可能性を示す場所として、台湾が出ている。ここでも台湾は植民地としての意味から、庶民が新しい可能性を求める空間としての意味に置換されている。台湾についての「異化」の手法は、後期の小説でも活発に駆使されているのである。

## 6. 台湾のエクリチュールと「異化」技法

漱石文学における台湾のエクリチュールを「博覧会の視線が注が

<sup>35</sup> 蘭信三 (1998・初 1994) 『『満州移民』の歴史社会学』行路社 P137

れた植民地台湾」と「新天地が求められた植民地台湾」に大別してその内容を検討してきたが、生身の展示で注目を集めた「臺灣の生蕃」のような、現代では批判されそうな言葉を漱石はあえてそのまま使ったが、猫の吾輩にそれを言わせることで人間全体を批評する文脈に置換している。ここでは、「現実そのものでは決してあり得ない言葉による表現を通じて、読み手に「ありのまま」というフシギな印象を与える」<sup>36</sup>効果を狙った「異化」の技法が使われている。また、建設専門家の目から見ても評価される台湾館については、当時の状況をそのまま『虞美人草』に書き込んだが、烏龍茶を紅茶に置き換えている点には西洋的価値観への批判が読み取れる。これも「異化」の技法の再現と認められよう。

「異化」の技法をさらに一步進めて、位相の置換に使うこともある。漱石の小説作品に見られる台湾への言及は、いずれも日本の植民地支配と密接に関係しており、また日本国内で生活できなかつた人々が転出していく土地として描かれている。こうして見れば、漱石は、当時の日本社会に流布していた台湾のイメージを、ありのままに見て、率直にそれを作品に取り入れたと言えよう。それは、ポストコロニアリズムの論調が批判するように、植民地台湾を新天地として求める日本社会の当時の方向性をそのまま認める視点である。ただ、その新天地である植民地「台湾」は、政府や国家レベルでの帝國的空間ではなく、「二十世紀のアダム」が暮らす異空間であり、それぞれ動機や進路は違つたとしても各境遇の人々がいろいろな可能を求めていく、いわば庶民の一種の避難所（サンクチュアリ）としての非空間であり、日本国内で否定された人々が逆に生存を許される反空間とも言える。こうしてみると、漱石文学の中で始終、時代の文脈に密着にして描かれていると見られる台湾のエクリチュールは、漱石文学にとって、帝国主義時代の近代文明の栄光を顕示する位相から、近代社会とは異質な空間として、近代社会で生活でき

---

<sup>36</sup> 前掲石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織書 P167

ない人々のサンクチュアリの位相に置換されているとも言える。

いずれにしても、漱石が当時の流行思想であり、当時の現代的価値観であった社会進化論から無縁の視線で、作品中に植民地「台湾」を位置づけていたのは確かである。時代記号のエクリチュールをそのまま作品に取り入れることで、その意味を反転させてしまうこうした手法は、「異化」の典型的な方法だと言えよう。

## 7. おわりに

日本近代文豪漱石の生きた時代は、19世紀後半から20世紀初頭の欧米列強とそれに追随した日本の帝国主義全盛時代の歩みそのものの時代である。そんな時代を生きてきた漱石は、近年、多様な演繹的理論研究、例えば1990年代以来のポストコロニアリズムのような研究の標的とされている。当然、明治維新以来の日本帝国の成長期を生きた日本の知識人の発言を当時の日本の帝国主義的政策の代弁と読み取ることは可能である。しかし、今回、略述したように漱石が2回の海外体験を通して獲得した独自の、反措定の視点は、台湾のエクリチュールにも「異化」の手法で継承されている。一見矛盾して見える反措定の見解や事実を取り入れながらその意味を置換する「異化」の手法は、実は単純な二項対立的思考からは無縁だった漱石の持つ独自の視点になるろう。漱石は、近代化の結果としての日本帝国の時代状況の中で、こうした手法を意識して駆使しながら自らの作品を構築しているのである。これこそテキストの文脈を正確に抑えた精読の客観性が、ポストコロニアル理論全盛の時代でも厳しく要請される理由である。漱石はそうした研究態度と方法に応える形で、確かなメッセージを作品中に刻みつけているのである。

本論文は、日本渥美財団法人がタイのバンコクで主催した「第1回アジア未来会議」(2013年3月9日)で口頭発表したものを修正、加筆したものである。

## テキスト

(1974-1976・初 1965-1967) 『漱石全集』 全 17 巻岩波書店

## 参考文献

(1903) 「3 月 7 日記事」『大阪毎日新聞』

(1903) 「3 月 9 日人類館瞥見」『大阪毎日新聞』

農商務省編 (1904) 『第五回内国勸業博覧会事務報告』 下巻

清水釘吉・伊東忠太・古宇田實・大熊喜邦・岡田信一 (1907) 「東京勸業博覧會報告書第二回」『建築雑誌』第 248 号  
建築学会

(1907) 『東京勸業博覧会案内』 精行社出版部

(1910) 「9 月 29 日日英博生蕃館 (上)」『台湾日日新報』

長谷川如是閑(1910) 「7 月 6 日日英博たより (三)」『東京日日新聞』

田原生(1910) 「9 月 30 日日英博生蕃館 (下)」『台湾日日新報』

(1975・初 1966) 『漱石全集』 第 11 巻岩波書店

(1976・初 1966) 『漱石全集』 第 14 巻岩波書店

(1976・初 1967) 『漱石全集』 第 16 巻岩波書店

石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織(1991)  
『読む ための理論文学思想批評』 世織書房

吉見俊哉(1992) 『博覧会の政治学：まなざしの近代』 中央公論社

蘭信三 (1998・初 1994) 『「満州移民」の歴史社会学』 行路社

青柳達雄(1996) 『満鉄総裁中村是公と漱石』 勉誠社

野村明宏 (1999) 「植民地における近代的統治に関する社会学：後藤新平の台湾統治をめぐって」『京都社会学年報』 7  
京都大学

春田哲吉 (1999) 『日本の海外植民地統治の終焉』 原書房

曾秋桂(2002・初 2001) 「漱石の東洋と西洋への眼差し」『夏目漱石  
試論－漢詩的東洋と小説的西洋の相克』 致良出版社

# airiti

- 松田京子 (2007・初 2003) 『帝国の視線』 吉川弘文館  
スティーヴン・J グールド著鈴木善次・森脇靖子訳 (2008) 『人間の  
測りまちがい—差別の科学史』 河出書房新社  
松下廸生 (2008) 「近代日本の博覧会における台湾館の建築造形につ  
いて」 『日本建築学会大会学術講演梗概集』 日本建  
築学会  
山路勝彦 (2009) 「日英博覧会と「人間動物園」」 『関西学院大学社会  
学部紀要』 108号  
陳慈玉著星野多佳子・藤井敦子訳 (2012) 「日本統治期における台湾  
輸出産業発展と変遷 (上)」 『立命館経済学』



◇2013年4月30日受理 ◇2013年6月25日審査通過